論　文

イタカ --オデュッセウスの故郷

野中　夏実

ホメロスの読者ならだれでも、イタカがオデュッセウスの故郷であり、その王国の中心であるということは知っている。『イリアス』と『オデュッセイア』によれば、オデュッセウスは、十二隻の船を率いてトロヤに遠征し、二十年後に故国イタカに帰りついたことになっている。ホメロスの叙事詩にどの程度信憑性があるか、それをどの程度事実を物語る史料として信頼してよいものか、ということには大きな問題があるが、ミケーネ時代に、イタカを中心として、レフカス、ケファロニア、ザキュントス、エキナデス諸島及びアハルナニアの一部より成るケファラノン国が形成され、一時期海洋王国として繁栄した、ということは、高度の現実性をもつ事柄としてうけ入れてよいであろう。

ホメロスのイタカはどこか？　という問題は、じつは、多くのホメロス学者、考古学者、歴史学者によって長いあいだ論争されてきた。すでにアリストテレス、アポロドーロス、プルタルコスなどの古代作家たちが、イタカについて言及している。ストラボンは、ホメロスの記述をもとにして、イタカを地理的に位置づけようとした。十九世紀末にはじまる最近の研究においても、この問題はくり返し論じられてきたが、そこでつねに出発点になっているのは、『オデュッセイア』IXの中のつぎの一節である。ここでホメロスはイタカがどういう島か、ということを詳しく説明している。

> 私の故郷は、はるかよりくっきりと見えるイタカで、そこにはそよぐ木々に蔽われたネーリトンの山がそびえている。まわりにはたがいに近く、人々の住む多くの島、ドゥーリキオン、サミ、そして森深いザキュントスがある。イタカはいちばんかなたに、海の中で西にむいているが、ほかの島は曙と太陽のほうにむいて横たわっている。土地はごつごつしているが、若者を養うにはよい島だ。私にとっては、自分の国ほど目に好ましく映るものはほかにない。(Od. IX. 21-27)

ここでまず目につくのは、ドゥーリキオン、サミ、ザキュントス、イタカという四つの島の名前である。これらの名前は、『オデュッセイア』I.245f, XVI.123f, XIX.131fでも同じ順番で登場しているが、オデュッセウスの統治するこの四つの島々は、地図の上でどれにあたるのだろうか。テレマコスのピュロスへの船旅からすると、オデュッセウスの王国はギリシアの西岸沖に位置していたようである。現在ドゥーリキオンという地名は残っていないが、イオニア諸島の中にはザキュントス（ザンテ）、イタカ（イサキ）の名をもつ島があり、サミはケファロニアの港の名として残っている。これらのことから考えると、ホメロスのいう四つの島の候補として、コリント湾の湾口に位置するイオニア諸島の四つの島、レフカス、イタカ（イサキ）、ケファロニア、ザキュントス（ザンテ）が浮かびあがってくる。

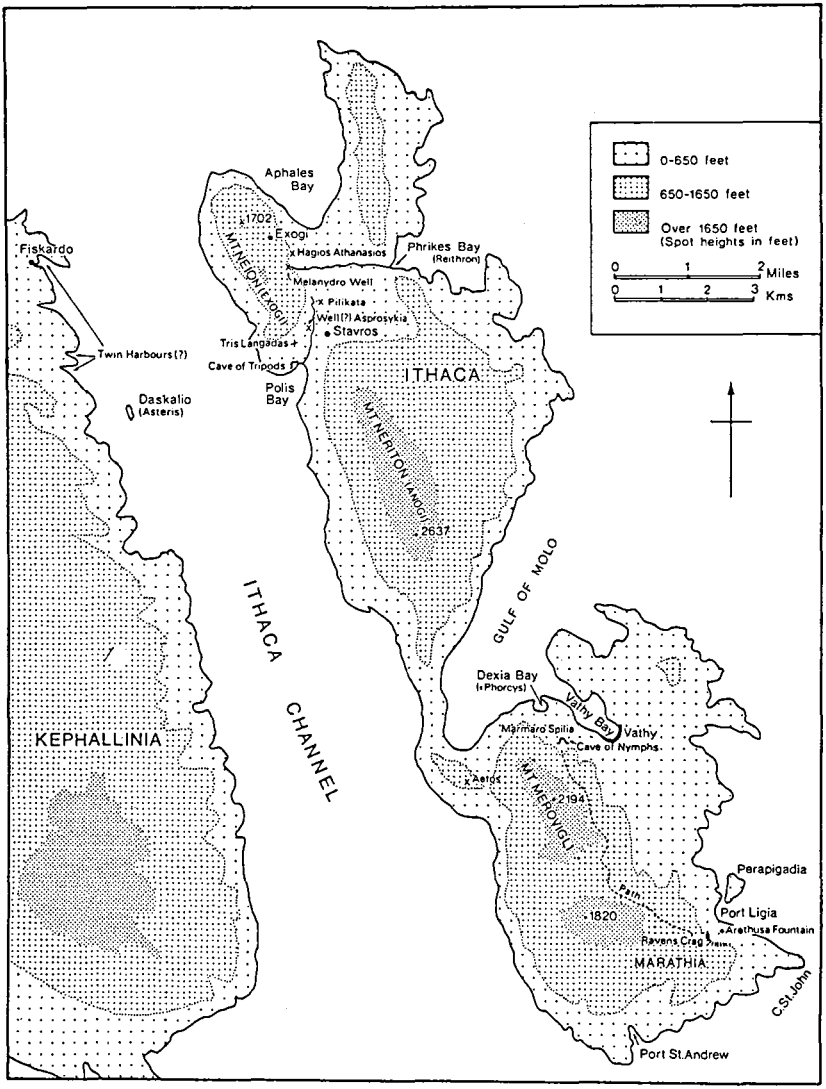
ホメロスのザキュントスは現在のザンテである、ということに関しては学者の意見はほぼ一致している。しかしほかの三つについては、ホメロスのイタカは現在のイサキであり、サミは現在のケファロニアであり、ドゥーリキオンはどこかほかの島である(Strab.10.2.10)とか、そうではなく、ドゥーリキオンはケファロニアだといった考え(Paus.6.15.7)など、なかなか一致がみられなかった。

厄介なのは、現在地名として残っていないドゥーリキオンが、ホメロスの記述では前述の四つの中でもっとも大きく、豊かな島らしいということである。『イリアス』の船のカタログによると、トロヤ戦争にドゥーリキオンは船を四十隻出したが、サミ、ザキュントス、イタカは合わせて十二隻しか出していない。(Il.II.625-637) また『オデュッセイア』には、ペーネロペーの求婚者の数は、ドゥーリキオンから五十二人、サミから二十四人、ザキュントスから二十人、そしてイタカから十二人という数字があげられている。(Od.XVI.247-251)

他の三つの島はともかくとして、イタカについてはそれを現在のイタカ（イサキ）と一致させてよいのだろうか。島の名前が古代からずっと変化していないのであれば、そうするのが妥当であろう。その点を、ホメロスの記述と現在のイタカの地理とを比較対照しながら、さらに遺跡の発掘報告をもとにした島のトポグラフィーから、すこし考えてみることにする。

*

ホメロスがイタカについて言及している箇所を拾っていくと、くり返し出



W.STANFORD & J.LUCE, The Quest for Ulysses, Phaidon.

てくる表現にはつぎのようなものがある。「はるかにくっきりと見えるイタカ」(Od. II. 167; IX. 21; XIII. 212; XIX. 132)、「海に囲まれたイタカ」(Od. I. 386, 395, 401; II. 293; XXI. 252)、あるいは、「岩だらけの、ごつごつした」とか、「広い道がない」といった表現も出てくる。たとえば『オデュッセイア』IVでテレマコスは、父親の便りを求めて訪ねたラケダイモンでメネラウスにむかってつぎのようにいう。

> イタカには馬を駆る広い道も牧場もありません。そこは山羊の草食む土地ですが、馬の草食む土地よりも私には魅力があるのです。海にむかって急な傾斜をなしている島は、馬を駆る道にも、牧場にも恵まれないものですが、なかでもイタカはそうなのです。(Od. IV. 605-608)

また『オデュッセイア』XIIIで、アテナ女神は、ようやく故郷にたどりついたオデュッセウスにむかってつぎのようにいう。

> 本当にこの土地はごつごつしていて、馬を駆るにはむいていません。でも広くはないけれど、とても貧しいというわけでもないのです。穀物と葡萄酒はたくさんできるし、雨も露も充分にあります。山羊や牛を飼う草地があり、さまざまな種類の木があり、涸れることのない水飲み場があります。だから、よそのお方、イタカの名はアカイアから遠いといわれるトロヤの地まではるばる聞こえているのです。
> (Od. XIII. 242-249)

イサキは総面積 114km²、長さ27km、幅6.5~0.62kmの、イオニア諸島の中で二番目に小さい島である。入り組んだ海岸線は、いくつかの天然の港があるほかは、海から直接切り立っているところが多い。平地が少なく、山の多い地形で、現在でも主にオリーヴの栽培と家畜(羊・山羊)の放牧が行われている。「馬の草食むアルゴス」というが、じっさいのアルゴスは広い平野である。テレマコスに贈り物に馬を与えようとするネストールの住むピュロスも平野である。そういう意味での平らな土地はイサキにはない。したがって、「海に囲まれた」、「広い道がない、馬を飼うのに適していない」、「岩だらけの、ごつごつした」――このような表現は現在のイタカ、つまりイサキにほぼあてはまるものだといってよい。

地図をみればわかるとおり、この島は南北二つの半島がわずか620mのアエトス地峡によって結ばれた恰好になっているが、この地峡部分にそびえるア

エトスの丘(381m)の上に一つの重要な遺跡がある。シュリーマンも1868年と1878年の二度にわたって発掘を行った場所だが、その後1931年からイギリス考古学研究所によって本格的に発掘された。

この381mの丘の頂上付近には前7世紀のポリゴナルの城壁が残っており、中腹には前5世紀の塔の近くにアルカイック期の聖所が発見され、数多くの幾何学文様土器やコリント土器が出土した。またふもとのミケーネ時代の墳墓からは前12世紀の土器も発見された。これらの出土品は、島都ヴァシの考古学博物館に収められている。

αετόsというのは、ギリシア語で鷲を意味する。アエトスの丘はじつに見晴らしがよく、そこからは丘の下の、船着場以外には何もない、ピソ・アエトスという小さな港や、すぐ対岸のケファロニアがよく見える。丘の上の城壁で囲まれた都市の遺跡は、現地の人には「オデュッセウスの城」(Κάστρο του Οδυσέα)と呼ばれ、一時はオデュッセウスの宮殿跡と思われていた。(William Gell, Schliemannなど)だが今ではオデュッセウスの宮殿は島の北部にあったとされており、アエトスの遺跡はストラボン(10.2.16)やプルタルコス(q.gr.43)のいうアラルコメナイ 'Αλαλκομεναί ではないかと考えられている。さらにここからは前4,3世紀頃の通貨でオデュッセウスのイメージのついたものが出土しており、ここでアルカイック期から古典期にかけて、アリストテレスの『イタカ人の国制』に書かれているような、独自の政治形態をもつ生活が営まれていたと推定される。オデュッセウスの顔の描かれた銅貨が発見されたことは、この島をホメロスのイタカと関連づける上で興味深い。

アエトスの丘と島都ヴァシのちょうど中間に、デクシアという名の小さな湾がある。そこからはアエトス地峡の北にあるネーリトンの山も見え、近くには鍾乳石の洞窟がある。『オデュッセイア』XIIIの中の一節から、このデクシア湾は、オデュッセウスがファイアケス人に送られてイタカに帰りついたときに、上陸した場所ではないかといわれる。アテナ女神は、故国にたどりついたがまだ自分がどこにいるのかわからないオデュッセウスにむかってつぎのようにいう。

> ここは海の老人フォルキュスの入江、あれが入江のはずれにある長い葉のオリーヴの木です。その近くに、ネーイアデスと呼ばれるニンフたちに聖なる、心地よい、ほの暗い洞窟があります。あそこにほら、あなたがニンフたちに、その甲斐ある百頭牛の捧げ物をした洞窟の、おおいかぶさる屋根があるでしょう。そしてむこうに見えるのが森に

蔽われたネーリトンです。(Od. XIII. 344-351)

オデュッセウスは、ファイアケス人にもらった贈り物をニンフたちの洞窟の中に隠し、アテナ女神と求婚者退治の策をめぐらした後、女神にいわれたとおり、豚飼いエウマイオスの住居へとむかう。

オデュッセウスは入江を後にして、ごつごつした小径を、森の中を上がり、丘の間を通って、アテナ女神が立派な豚飼いが住んでいると教えてくれたところへと進んでいった。(Od. XIV. 1-3)

豚飼いは、「烏が岩とアレトゥーサの泉のそばに」(Od. XIII. 408)いる、というのだが、ヴァシから南へ5kmいったところにある、ペラピガディという泉が、ホメロスのアレトゥーサの泉ではないか、そしてさらに南のマラシアスの平地のあたりで、エウマイオスが豚を飼っていたのではないかといわれている。また島の南岸のアギオス・アンドレアス(あるいはアンドリ)の港は、テレマコスがピュロスからの帰りに求婚者たちの不意打ちを避けるために上陸したところだともいわれている。

さて今度はヴァシからアエトス地峡をとおって島の北部へむかうと、右手にネーリトンの山がある。ホメロスに「木々に蔽われたネーリトン」(Νήριτον εἰνοσίφυλλον)(Od. IX. 22)と謳われ、プリニウス「イタカにはネーリトンの山がある」(Ithaca...in qua mons Neritus)(N. H. IV. 55)、ウェルギリウス「険しい岩のネリトゥス」(Neritos ardua saxis)(Aen. III. 272)など多くの古代作家によって言及されている山である。

イサキ北部でいちばん大きな村スタヴロスから歩いて二十分ほど下っていくと、ポリスという名の小さな湾に出る。湾の西北岸にルイゾス洞窟(Louizos cave)と呼ばれる洞窟があり、1930年にイギリス考古学研究所によって発掘された。ここからは、ミケーネ時代よりローマ時代にいたるまでのあらゆる時期の土器片のほか、銅製の三脚が12個と、「オデュッセウスへの誓い」(ΕΤΧΗΝ ΟΔΥΣΣΕΙ)という文字の刻まれた粘土製のマスクのかけらがみつかった。銅製の三脚がいくつも出てきたことは、オデュッセウスがファイアケス人から三脚と釜を贈り物にもらったこと(Od. XIII. 13-14)を思い起こさせる。そして特に、「オデュッセウスへの誓い」と刻まれた前2世紀頃のものと思われる奉納品は、先のオデュッセウスの顔のついた銅貨とともに、イサキとオデュッセウスとのつながりを示す重要な証拠品であり、この土地でオデュッセウスが英雄崇拝の対象となっていたのではないかということを示唆して

いる。これらの出土品は、スタヴロスの小さな博物館に収められている。

スタヴロスから北に1kmのペリカタの丘に、イサキのもう一つの重要な遺跡がある。1930年から行われたイギリス考古学研究所の発掘によって、初期青銅器時代の住居跡がみつかったほか、平らな丘の上に一部残っている城壁は、土器片によってミケーネ時代のものであることがわかっている。ここは、西にポリス湾、北にアファレス湾、東にフリケス湾というように、三方に海が見える、見晴らしの点では絶好の場所といえる。この丘が、オデュッセウスの宮殿跡ではないかといわれているところである。ついでにいえば、テレマコスがネストールに「我々はネーイオン山のふもとのイタカからやってきました」(Od. III. 81)というときのネーイオン山は、現在エクソギと呼ばれる、ポリス湾とアファレス湾のあいだの山(340m)だとされており、老ラーエルテスの住居もそこにあったと考えられている。

このように、ホメロスのイタカを現在のイタカに一致させてよいかどうか、ということについて、ホメロスをはじめとする古代作家の引用にもとづいて文献学的に、そして遺跡の発掘報告にもとづいて考古学的に、検討を加えてきた。このイタカ＝イサキ説に対してはしかし、反論がなかったわけでもない。今世紀はじめにドイツ人考古学者のウィルヘルム・ドルプフェルトは、ホメロスのイタカは現在のレフカスである、というイタカ＝レフカス説を唱え、一大論議をまきおこした。(cf. Wilhelm Dörpfeld, 'Das homerische Ithaka', Mélanges Perrot, Paris, 1903, pp. 79-93) ドルプフェルトとその支持者はつぎのように主張する。イタカについてのホメロスの記述は、イタカよりもレフカスによくあてはまる。というのも、ホメロスのイタカはじつはレフカスだったのである。つまり、レフカス（ホメロスのイタカ）の住民がドーリア人に追い立てられてイサキ（ホメロスのサミ）に移住し、移り住んだ島に自分たちがもともと住んでいた島の名前をつけたために、そこはイタカと呼ばれるようになった。同様に、イサキ（ホメロスのサミ）の住民はケファロニアに移住し、そこにもともと住んでいた土地の名前（サミ）をつけた。こんな風に、島の名前の不一致をドーリア人の侵入によって説明する。

だがドルプフェルトの打ち出したイタカ＝レフカス説には、矛盾している点もかなりある。イタカ＝イサキ説の支持者は、ドルプフェルトは『オデュッセイア』IX. 21-27 などのイタカについての記述を誤って解釈し、それをレフカスにあてはめている、といっている。ホメロスの字句の解釈は別にしても、レフカスはもともと島ではなく、アハルナニアの半島であったのを、前7世紀にコリント人植民者が運河を掘って島にしたのだといわれている。

(Livy. XXXIII. 17; Thucydides. III. 94, IV. 8; Strabo. 1. 3. 18, 10. 2. 8) そうだとすると、オデュッセウスの時代、つまりこれらの島々が伝説上の王オデュッセウスによって治められていた前12世紀頃にはレフカスはまだ島ではなかったということになる。それにドルプフェルトは、自説を証拠立てようとしてレフカスで発掘を行ったが、思わしい結果はなく、ホメロスに描かれているような場所はみつからなかったのである。

*

以上のように見てくると、ホメロスのイタカは現在のイタカである、と考えてさし支えないようである。そして今では学者の間でもそう考えるのが有勢になってきている。ただイタカには未だ発掘されていない重要な遺跡もあり（キュクロペース様式の城壁と石畳の道が残っている、キオーニの近くのルーガなど）、今後の発掘によって何か新しいことがわかるかどうか期待されている。

ITHACA
The Homeland of Odysseus

The reader of Homer knows that Ithaca is Odysseus' home island and the capital of his kingdom. *Odyssey* relates the story of his long homeward journey from Troy to Ithaca, where Penelope waits his return with her extraordinary patience.

But where indeed is Ithaca? Is it a mythical realm which exists nowhere in the real world, or can it be located on a map, possibly as one of the Greek islands that retain their Homeric appelation?

Since antiquity, this has been a much-discussed issue, and many Homeric scholars, archaeologists and historians have tried to associate Homer's Ithaca with one or another of the Ionian Islands. In this article, I will reexamine the problem from a philological as well as an archaeological point of view, to see whether it is possible to recognize our Homeric Ithaca in present-day Ithaki, the small, barren island off the Acharnanian coast.

The relevant passages in the Homeric poems seem to coincide in general with the topographical detail of Ithaki. The exact location of the Homeric capital is still in question, but the Mycenaean ruins found at Pelikata have some probability of being the 'asty' rather than those at Aetos, which are occasionally associated with the archaic town of Alalkomenai. Moreover, objects of extreme interest have been found --- 4-3cB.C. coins with the image of Odysseus, twelve geometric bronze tripods and a fragment of a 2cB.C. votive clay mask with the inscription "my vow to Odysseus" --- which strongly suggest the identity of the island with that of Homer's.

There have been theories, however, that Homeric Ithaca was situated somewhere else, of which the most outstanding was expressed by the German archaeologist Wilhelm Dörpfeld. But as a result of refutations and excavations, his theory that the island of Levkas was Homer's Ithaca proved to be groundless.

Therefore, at this point, I consider that Homeric Ithaca is identifiable with present-day Ithaki, although further excavations are expected to cast new light on the problem.